https://www.radionikkei.jp/kansenshotoday/

2023 年 7 月 3 日放送

「COVID-19 後遺症の現状」

大阪大学大学院　感染制御学教授　忽那 賢志

はじめに

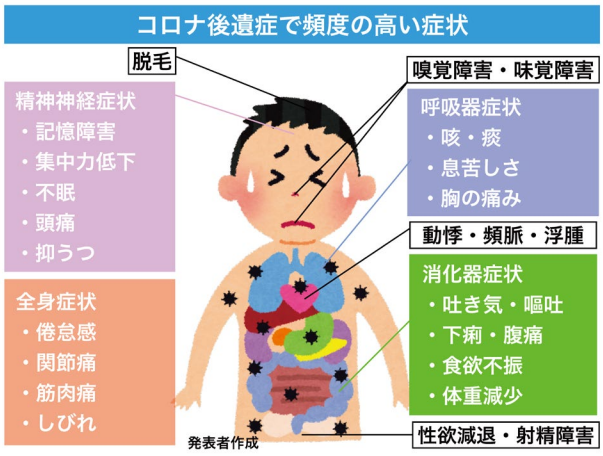
本日は、新型コロナ後遺症について、お話をさせていただきます。

これまでも感染症に罹患した後に、いわゆる後遺症という症状が見られることは他の感染症でも報告されていました。例えば、デング熱やライム病といった感染症に感染した後に、長く倦怠感が続いたり、あるいは脱毛が見られるとか、そういった症状が見られることが知られていました。そして、この新型コロナウイルス感染症が出現した後にも、この後遺症の症状が見られる人が一定の割合でいるということが分かってきました。

新型コロナ後遺症の症状・病態

新型コロナ後遺症は、海外では「LONG COVID」あるいは「post COVID-19 condition」などと呼ばれることがあります。定義については、まだはっきりとしたものはありませんが、発症した後、1ヶ月後あるいは3ヶ月後などの期間においても倦怠感などの症状が持続する状態を指すことが多いです。

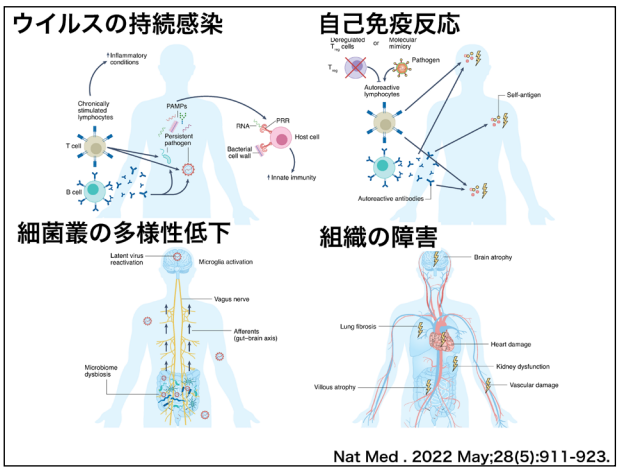
後遺症として、頻度が高い症状としては倦怠感が最も多いと言われていますが、それ以外にも、関節痛・筋肉痛・しびれなどの全身症状や咳・痰・息苦しさ・胸の痛みなどの呼吸器症状、そして吐き気・嘔吐・下痢や腹痛・食欲不振・体重減少などの消化器症状、そして記憶障害・集中力低下・不眠・頭痛・抑うつなどの精神神経症状などが見られることがあります。



これ以外にも、嗅覚障害や味覚障害、動悸、頻脈、浮腫、脱毛、あるいは性欲減退、射精障害など様々な症状が新型コロナの後遺症として報告をされています。

このコロナ後遺症の原因については、まだはっきりと分かってはいませんが、複数の要因が複合的に絡み合っておこっている病態だと考えられています。

コロナ後遺症の病態として、「ウイルスの持続感染」つまり感染し回復した後も、新型コロナウイルスが少量残存していて、呼吸器や消化管などで持続感染をおこしているという病態や、「自己免疫反応」これは新型コロナに感染した時に、自分の免疫がウイルスに対して反応をおこしたものがその後も長期間、自己免疫反応として、自分の体を攻撃し続けているといった病態、そして「細菌叢の多様性低下」これは特に消化管の中の細菌のバランスが乱れて、それによって様々な症状をおこしているのではないか、そして「組織の障害」、これは特に急性期に様々な臓器、呼吸器や心臓、肺や肝臓、脳など様々な臓器に障害がおこって、それが遷延している状態、こういった病態が考えられています。こうした 4 つ、あるいはそれ以上の病態が複合的に絡み合っておこったものが、コロナの後遺症ではないかと現時点では考えられています。



これまでの報告によると、海外の報告では、コロナに感染した 5〜7 人位のうち 1 人が後遺症、つまり 3 ヶ月以上続くような症状を経験していると報告されています。後遺症を経験しやすいのは、若い人よりも高齢の方に多いということや、コロナに感染した際に軽症であった人よりも重症であった人に多い、そして男性よりも女性の方が多いと言われています。

そして現在は、オミクロン株という感染力の強い変異株が広がっていますが、このオミクロン株になってからは、それ以前の変異株と比べると、後遺症になるリスクが低くなっているのではないかという報告も出てきています。

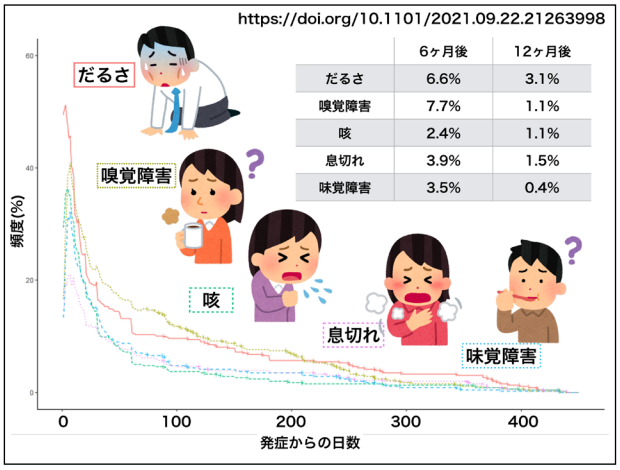
コロナ後遺症 LONG COVID

- アメリカではコロナに感染した5人に1人が後遺症（3ヶ月以上続く症状）を経験
- アメリカに住む13人に1人が後遺症に悩んでいる
- 50代は80歳以上よりも3倍以上後遺症になりやすい
- 女性は男性よりも後遺症になりやすい
- オミクロンは後遺症が起こるリスクがデルタの半分以下
- ワクチンが後遺症の予防や症状改善に有効？

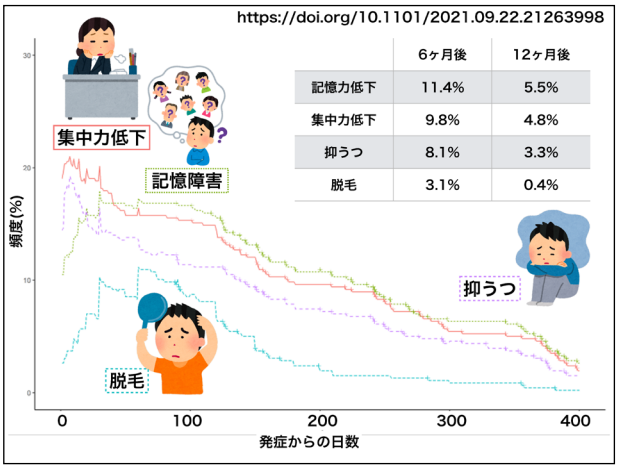
BMJ 2022;377:e069676
DOI:https://doi.org/10.1016/S0140-6736(22)00941-2
CDC. Nearly One in Five American Adults Who Have Had COVID-19 Still Have “Long COVID”

日本国内の報告

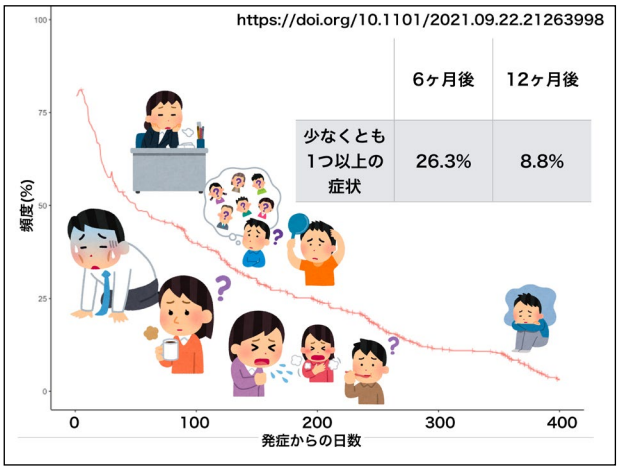
日本国内の報告を見ても同様に、やはり長期間コロナの後遺症として症状が続く方が報告されています。例えば、国立国際医療研究センターで行われた約 500 人を対象に調査された後遺症の研究では、大半が軽症や無症状のコロナの患者さんであったにもかかわらず、倦怠感は半年経っても 6.6%、1 年経っても 3.1%の人で見られたという報告があります。



また、いわゆるブレインフォグ（Brain Fog）と呼ばれるような、記憶力や集中力の低下、こうした症状は半年経っても約 1 割の人で見られたということや、1 年経っても 5%前後の人で見られたという報告が出ています。むしろ、こうしたブレインフォグの症状の方が倦怠感あるいは息苦しさ咳痰などの症状よりも長く続くのではないかと言われています。



同じ国立国際医療研究センターの報告では、少なくとも一つ以上の後遺症の症状で悩んでいる人は、半年経っても 26.3%、つまり 4 人に 1 人位が後遺症に悩んでいる、1 年経っても 8.8%およそ 11 人に 1 人の人が後遺症に悩んでいるという結果でありました。



基本的にこの後遺症というのは、症状がたつとだんだんと改善してくると言われていますが、現時点では後遺症になった状態で何か有効な治療法というものは確立されていません。

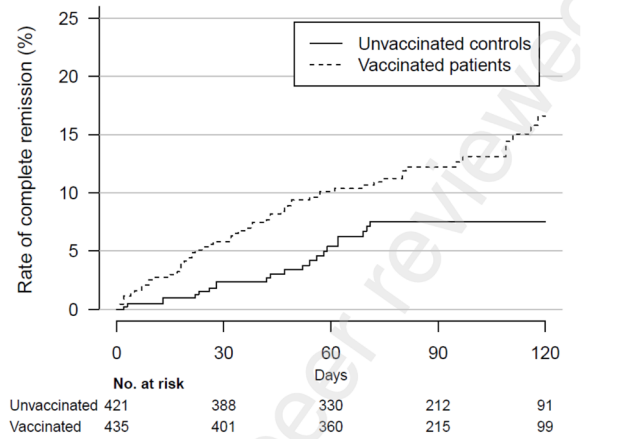
後遺症のリスク軽減方法

一方で、後遺症になりにくい条件、後遺症になるリスクが下がるものは何かという

ことで探索が行われています。

その中の一つに、ワクチン接種があります。新型コロナウイルス感染症に感染する前にワクチン接種を行っている人は、ワクチン接種をしていなかった人と比べると、後遺症がおこるリスクが低いという研究が複数出ています。

3週間以上症状が続いていたコロナ後遺症の患者のうち、ワクチン接種をした455人は、ワクチン接種をしていない455人と比べて登録から120日後時点で後遺症の症状のある人が減っていた

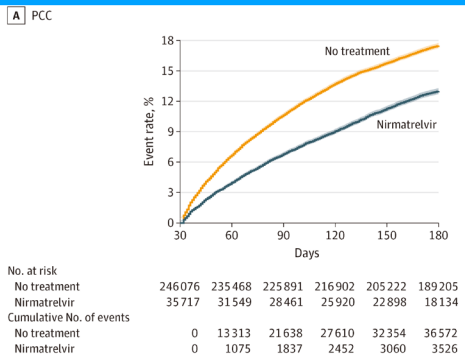


https://ssrn.com/abstract=3932953

ワクチン接種を受けることで重症化しにくくなりますので、そういう意味で後遺症になりにくいとも考えられます。また、最近になって抗ウイルス薬、つまりウイルスの増殖を阻害する薬を、急性期つまりコロナに感染して症状が出ている時期に飲むことで後遺症の症状が出にくいという報告が出ています。

こうした抗ウイルス薬の中には、ニルマトレルビル（商品名：パキロビッド）、あるいはモルヌピラビル（商品名：ラゲブリオ）、そして日本国内で開発されたエンシトレビル（商品名：ゾコーバ）でも急性期に抗ウイルス薬として内服することで、その後のコロナ後遺症の発症が減るという報告が出てきています。

SARS-CoV-2感染者で重症化リスク因子を1つ以上有する281793人を対象に、無治療の246 076人と比較したコホート研究において、急性期のニルマトルビル使用（n = 35 717）は、急性期後の様々な臓器系における13の後遺症中10のリスクの低減、急性期後の死亡や急性期後の入院のリスクの低減などPCCリスクの低減と関連していた。ニルマトルビルは、ワクチン未接種者、ワクチン接種者、ブースト接種者、SARS-CoV-2初感染者、再感染者において、PCCリスクの低減と関連していた。



doi:10.1001/jamainternmed.2023.0743

しかし、これらはいずれも「後ろ向き研究」という後ろから遡ってデータを取ったものですので、今後より確かな研究が待たれるところです。

また、後遺症の症状に悩んでいる人が、新型コロナワクチンを接種することで、コロナ後遺症の症状が軽減されるという報告も出てきていますが、これについては先ほど申し上げた「ウイルスの持続感染」という病態が、一部のコロナの後遺症患者さんで関与している可能性があると考えられています。

コロナ罹患後症状のマネジメント

新型コロナ後遺症については、厚生労働省から罹患後症状のマネジメントとして『新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き』が出ています。ホームページなどから参照できます。様々な症状を訴えていらっしゃる患者さんに対して、どのような検査をして、どのような疾患を除外して、どう対応すればいいのかという診療の手引きになっていますので、医療従事者の方はこの診療の手引き、罹患後症状のマネジメントについてご参考いただければと思います。

コロナ後遺症

- 原因や機序はまだわかっていないが、COVID-19に罹患した患者の一部で遷延する症状がみられる
- 症状は時間経過とともに改善していく
- オミクロン株になってから後遺症の頻度は減っている
- ワクチン接種者では後遺症の頻度が少ない。後遺症患者にワクチン接種をすると後遺症の症状が改善するという報告がある
- COVID-19急性期に抗ウイルス薬を投与すると後遺症が減るかもしれない

番組ホームページは https://www.radionikkei.jp/kansenshotoday/ です。
感染症に関するコンテンツを数多くそろえております。